季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻24号

冬号

2006-7

12,1,2月

新潟県鉄道発祥の地記念 ななめ読み 120年前の鉄道

金谷山グラフティー 思い出のジャンプ台

巻頭エッセイ◉このまちのこと

もののけはい

◉ この人に学べ ◉

時代の扉を開けた人

室孝次郎

配流800年 親鸞の風景

ゐなかの人々と親鸞2

【カメラの眼】

秋まちなか点描

季刊 直江の津 第24号 冬号
2006・07―12・1・2

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
　もののけはい　岸田國昭　3

■配流800年 親鸞の風景
　連載4　ゐなかの人々と親鸞2　松野純孝　4

■〔新潟県鉄道発祥の地記念〕
　120年前の鉄道　6

■金谷山グラフィティー
　思い出のジャンプ台　川島秋男　12

■この人に学べ　室孝次郎　17

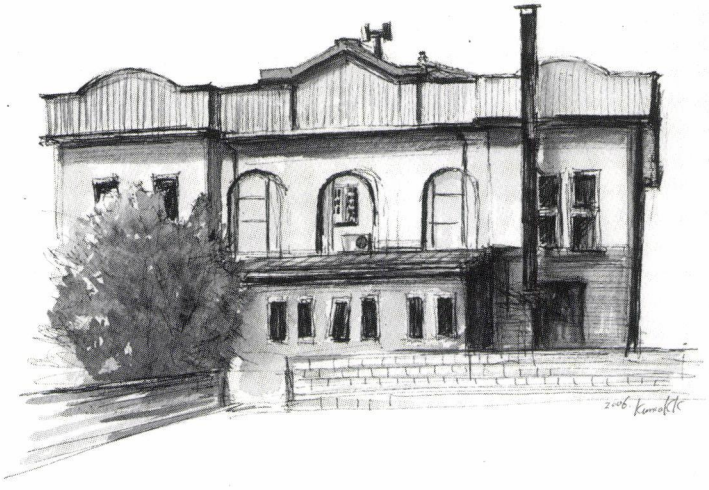
■カメラの眼　22

■読書びと
　同じうたをうたい続けて　神沢利子著　26

■建物さんぽ　24

■上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



高田本町六丁目「高田日活」 岸田國昭画

♣巻頭エッセイ
岸田國昭さんのこと

昭和38年　新潟県上越市板倉区(旧板倉町)生まれ
美術作家／商業図案師／白鳥上越後援会事務局長
武蔵野美術大学大学院油絵研究科修了
神奈川県展美術奨学会賞受賞
セントラル美術館油絵大賞佳作受賞
銀座画廊、そごう百貨店等個展多数
現在創作活動は、男ながら育児休暇中

もののけはい

岸田國昭

「空気が出来上がってますな」。開口一番に笑福亭鶴瓶師匠は、古い劇場に対して賛辞？の言葉をのべられた。平成十八年七月のことである。どういう空気を感じたのか私には計り知れないが、満面に笑みをたたえた師匠は、定員三百に満たない劇場の雰囲気に満足し、その日夕刻から始まる寄席の打ち合わせを始めた。

街や通り、家や店には、大なり小なり気配を匂わせる何かが存在する。そこに生活し、棲んでいる人間の意志や思いが長年に渡って堆積し、まとわりつき、折り重なった気配。私は、そんな気配を存分に発散させて、どことなく居心地が違い、自分だけが異邦人のように感じる空間との出会いがとても好きだ。そんな理由もあって二十代の頃に色々な気配を求めて、色々な街を訪ね歩いた。南大阪の富田林市、奈良の明日香村、三重の伊賀上野市など、膨大な気配の後ろに、深くて不思議な世界を見せつけている街と出会い大好きになった。

七年前に父の病気が理由でUターンをした。そして驚いた。加賀街道と思っていたのが山麓線だったという驚きもあったが、それ以上に高田や、直江津、新井の街並みが醸す気配の強さだ。なんで今まで気づかなかったのだろう。それまでは、なんの興味も引かなかった路や、神社や、店や、家。面白いように気配を発散させているではないか。二十年近く離れていた上越の街々は、若い自分では感じることの出来なかった不思議な気配で満ち溢れていた。以来、休日ともなれば直江津迷宮に迷い込み、頸城の沼池巡りに疾走する日々が続いている。

先日、昨年高田日活で高座を持たせて頂いた柳家花緑師匠と、別の落語会の打ち上げで酒席を共にさせて頂いた際「岸田さん、あの劇場まだ元気でやっていますか」。そういいながら隣の林家きく姫師匠に高田日活の説明を始めた。師匠もやはり空気を感じ、気配を感じたのだろう。そしてその気配に取り込まれた。

この街の気配。私もたぶん気配に取り込まれたひとりだ。気が付けば自分の生活の一部が、知らず知らずとまとわりつき、思いを堆積させ、行ったり来たりを始めている。淡彩絵の具を一層ずつ重ね塗るように、少しずつ少しずつ。

配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載4

ゐなかの人々と親鸞 2

―和讃、分かち書き―

松野純孝

十字名号本尊の帰命尽十方无碍光如来について親鸞はこう解説する。まず帰命とは南无の訳語で如来の勅命に従い奉る意。尽十方无碍光如来とは阿弥陀如来で光明・智慧の形。尽十方とは尽はつくす、悉くという、十方世界を尽くして悉く満ちたまうのである。无碍とはさわることなしで、衆生のどんな煩悩悪業も妨げにならない。十方微塵のどんな所にも悉く満ちたまいて、ただただ衆生の済度に無倦にして余念がないと知るべしと。そこでは単に人間だけではなく草木国土もみな成仏できるとした。親鸞の解説は一語一語を克明に吟味し、それを積み重ねて、終に門弟達をして念仏は何ものも妨げることのできない無碍の一道なりと言わしめた。十字名号本尊はかくて南无阿弥陀仏の六つの字のこころを最もよく言いあてている聖教でもあるのである。明恵の名字本尊、日蓮の文字曼荼羅も本尊であると共に聖教でもあった。

つぎに必須の聖教について親鸞の和讃を取りあげよう。その初稿本の首数の総計は実に五一三首といわれ、このほか草稿本の所収や別和讃等を加えると膨大な数になる。

和讃は漢文の経釈文等を和語でやわらげた讃咏で次のような特徴を持っている。①漢字の右にふりがな、②左にその意味（左訓）、③更に漢字右の一々にその音の高さのアクセント。即ち平らな平声、しり上がりの上声、しり下がりの去声、終りをのむ入声の四声の声点が清濁、緩急、長短、高低にわたって示されている。その音図が浄土高僧和讃の最初に掲げられている。④七五調の今様で四句一首、⑤より分かり易くうたいやすいように改訂が重ねられている。以上五つの特色の一々は正しくゐなかの人々が対象であったからにほかならないことを雄弁に物語っている。



今様は当世風という意味で、今様歌は現代風の俗謡、流行歌。後白河院編今様の『梁塵秘抄』にその題名に関して記されている。昔、中国で虞公韓娥という人、声がよく妙にして聴く人々は賞で感じて涙をおさえぬばかりだった。韓娥が謡うと、梁の塵が総起ちになり、三日間もそのまま起ちつづけたというので、梁の塵の秘抄と名づけたというのである。後白河院は生涯今様を愛好し謡っ

ていた。当時の記録にも今様歌の勝負事が一週間も続けられ、勝か負か、引分かが見え、盛んであった。雑談集等の、庭に十歳ばかりの少女童がうたっていた今様が親鸞の和讃に収められている。これならゐなかの人々も歌うわけである。漢文の経釈文が今様にやわらげられ、而も日本人の調べである七五調のリズムでうたう和讃。読書百遍義自ら見るといわれる。和讃をかく何遍もうたっておれば、その意趣はおのずから頷かれてくるのでないか。

金信昌樹氏は親鸞は四声点を基本としながら六声点にもなっているという。親鸞のアクセント感のすばらしさに驚く。親鸞は南无阿弥陀仏にナモワアミダブチとふりがなしている。阿はアでなく、ワアの音なのである。仏はブツではなくブチ。道元の正法眼蔵はもと白文であったという。当時のいわゆる高僧達の著作にはふりがながない。親鸞のにはふりがながついている。金子彰氏は親鸞がかなづかいに意を用いていた実態を報告しており、国語学では親鸞の著作は貴重な資料となっている。橋本進吉氏によると奈良時代迄は日本人は八十八の音を持っていたと。その繊細さに驚嘆する。親鸞の繊細に着目しなければならない。

親鸞自筆の和讃の完本は現在のところない。親筆の和讃の断簡は諸所に散在している。これはどういうことであろうか。和讃は四句一章で、一首一首独立している。思想が一首ごとにまとまっている。このことは和讃の一首一首が聖教であることを語っている。ゐなかの人たちは親鸞の経釈文を讃咏して和讃の断簡を掛け、咏唱しながら聖教として味わっていたからに相違ない。親鸞は門弟たちにまず本尊と聖教を与えていた。その聖教は最初和讃であったのではないか。ゐなかの人々にとってはうってつけのものだったのだ。正像末法和讃草稿本を拝誦すると、真仏らが収集した和讃を親鸞が増広補訂して編集しているようにも思われる。

さて、当時のかなばかりで句読点もなく綴られていたものは、どう判読したらよいか見当がつきかねるので、親鸞は左のように分かち書きをしていた。

タトヘハ・ヤナキノ・エタニ・サクラノ・ハナヲ・サカセ・フタミノ・ウラニ……

（西本願寺蔵親鸞自筆唯信抄）

一ニシテ　サラニ　コトナル　コト　ナキ　ナリ
ツキニ　ミツカラノ　ハカラヒ……

（大谷大学蔵端坊本歎異抄。高橋正隆氏の翻刻本による）

これなら分かる。これは吉沢義則氏の見出されたもので、親鸞の独創とされている。

十字名号本尊、分かち書きはゐなかの人々在っての独創であった。このことは思想形成の上でも言える。例えば信心発起の和讃で発起の左訓。発はひらきおこす。起はたておこす。むかしよりありしことをおこすを発といふ。いまはじめておこすを起といふ。真実の浄土に往生する信心は既に私達衆生の一切に埋め込まれている。草木にもと。このような端的な言葉は親鸞の著作には見出し難いもの。

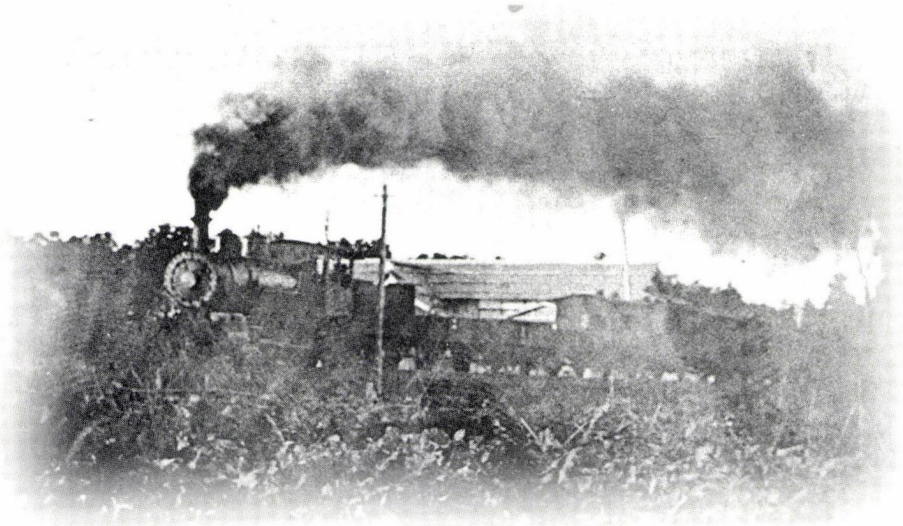
和語の著作にみる左訓は、ゐなかの人々によってみがきこまれたものといっていい。親鸞は身を田夫野叟のゐなかの人々に侔しくせんとして、ゐなかの人々にたえうる思想を創っていった。

本テーマは更に、僉議の精神、大地の人、一念信心往生、真宗の修行等を展望して筆を擱く。

ななめ読み

〔新潟県鉄道発祥の地記念〕120年前の鉄道





上　春日山駅を通過するＣ57　平成18年10月15日　　下　開業間もない信越線

事の始まり

明治十九年（一八八六）八月十五日、直江津―関山間を蒸気機関車が走って百二十年。

上越地方での鉄道敷設運動は、室孝次郎が地元の有力者を説いて出資者を募り、明治十七年、信越鉄道株式会社設立と直江津―軽井沢間の鉄道敷設を政府に申請したことに始まる。十四年には日本鉄道会社が設立され、上野―高崎間の鉄道敷設工事を開始しているが、これは士族と政府の半官半民の会社であり、信越鉄道会社は純然たる民間会社であった。

鉄道開業当初、東京と関西を結ぶ大動脈として東海道と中山道の二案があった。東海道案は海運との競合が懸念され、沿線の地域開発も兼ねた中山道案が主流であった。

東海道は海岸を通るため、海防上からも否定されたと言われているが、後に中山道をあっさり捨てて東海道にルート変更している。

機関車は海から

明治十七年、政府は中山道案で着工を決定した。日本鉄道の終点高崎から北進し、碓氷峠を越えて現在のしなの鉄道・田中周辺から



めがね橋（碓氷峠第3橋梁）高さ31・39m・長さ91・06m 45、987円の巨費を投じて明治二六年開通。翌二七年に耐震補強をしたため橋脚が途中から太くなっている。

左に折れ、国道一五二・二五四号線沿いに鹿教湯温泉から松本へ達する計画だったらしい。

この間の碓氷峠越えは難工事が予想され、直江津―上田間に支線（補助線）を通し、資材を直江津港から荷揚げして上田から軽井沢方向にも工事を進めようということになった。

このために孝次郎の私鉄案は却下された。

明治十八年四月に直江津から測量を開始、七月七日〈直江津港〉からレールが陸揚げされ、八月十一日には機関車と貨車十六輌も到着した。

資材を積んだ二千トン近い熊本丸は、どこへ接岸したのであろうか。荒川（関川）西岸に資材の陸揚げ用に敷設された、後の〈浜線〉の岸壁ではとうてい接岸は不可能であろう。

熊本丸は沖合に停泊し、大量の艀を動員して荷降ろしが行われたようだ。そのさまは壮観だったといわれているが、三十トンもある機関車はどのようにしたのであろうか。

レールの陸揚げと同時に敷設が開始され、十一月には新井まで到達し、十九年には関山まで開通した。

しかし、碓井峠越えはあまりの急勾配のため、政府は上田から松本方向への計画を断念、十九年の時点で一転して東海道案へ変更してしまった。

中止の危機に立たされた関山からの南進は、室孝次郎等の熱心な運動で継続され、二一年に軽井沢―横川間を除いて高崎まで開通し、一躍、東京まで一直線につなぐ幹線の役割を担うことになった。

明治二六年、ようやくアプト式鉄道で碓氷峠を越え、高崎―直江津線は二八年に信越線と改め、四二年には信越本線となった。

清水トンネルが開通して、上越線が全通するのは昭和六年である。信越本線の早さには驚かされる。

信越鉄道が官営で決定（存続）された理由ついて、郷土史家渡辺慶一は、高田事件（自由民権運動）の生き残り上田良平からの聞き取りとして、鈴木昌司・八木原繁址（共に高田事件に連座）等が、不当弾圧の〈落とし前〉をつけさせようと政府にねじ込んで、敷設決定を引き出したのだと語っている。

東へ

盛んな鉄道敷設運動は、人口が急増する東京へ〈豊富な越後の米〉の移出にあったとよく言われることだが、当時、いわゆる蒲原の米は〈鳥またぎ米〉と言われて質量とも悪かった。一方、東京廻米問屋組合第三回玄米品評会へ〈珍光〉という銘柄の米を明治四三年に直江津駅から出荷している。十把ひと絡げに「越後の米」と言うわけにいかないものがあるようだ。

その新潟方面への信越線延伸は、明治二九年、北越鉄道株式会社によって着工される。三十年に春日新田仮停車場（春日神社の位置）―鉢崎間、三二年荒川鉄橋開通で現在の位置の直江津駅と結ばれ、三七年に新潟まで全通した。



品評会へ出品のために貨車に積み込まれる米俵。珍光という銘柄は三和区産と思われる
明治四三年三月



数少ない開業当時の明治の面影を残す柿崎駅

関根干城・せきねかんじょう　安政四年（一八五七）福島村西福島に生まれる。明治十二年、郡制施行で南川村が誕生し、二二歳で初代村長となる。七五歳没。（頸城村史）

コレラと鉄道忌避

この工事中の明治三十年七月、未曾有の大雨に見舞われた保倉川が増水し、西福島地区の水田に水没の危険が出た。南川村（後に頸城村）村長関根干城は村民を指揮、橋脚の一部を破壊して保倉川の流れを良くし、その上で線路の敷石を数か所撤去して排水、水田を全滅から救った。しかし公共物の破壊の容疑で検挙され、一年後にようやく無罪を勝ち取るというエピソードが残っている。

上田までの工事区間で最大の難関は〈大田切工事〉であった。

関山駅から田口駅（妙高高原駅）に達するためには、妙高山を源とする大小の渓谷が関川に合流する直前の〈崖っぷち〉を横断しなければならなかった。それには大規模な橋梁工事が必要であった。しかし財政面や技術的な点から築堤によって横断しようと考え、大田切では幅七・六、高さ七・八、長さ九五メートルの水路トンネルを構築し、線路を敷設する面まで、高さ三三メートルの土盛りをした。着工から一年八ヶ月という突貫工事であった。

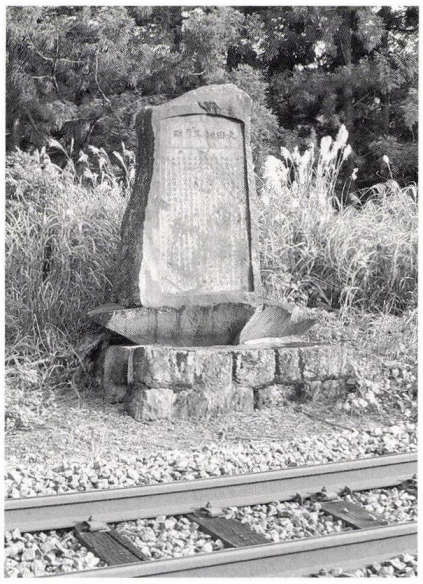
この工事での死者七九人の霊を弔うため、工事を請け負った鹿島組（鹿島建設）は、総監督・大技長松本壮一郎が題字を揮毫し、「大





直江津駅の駅弁は明治34年、古川屋・いかや（センチュリーイカヤ）・山崎屋（ハイマート）の三店交代で売り出された。それは、おかずとご飯が別の二段重ねの豪華版だった。





大田切工事碑
碑は工事請負の東京鹿島組鹿島岩蔵が、この難工事を後世に伝えたいと、工事の概要と死者79人のうち63人がコレラによる死者だったことを明記し、裏面に死者の名前と出身地を刻んだ。



開通した大田切築堤工事
（「信越線の百年」信濃路出版刊より）
大田切川に、高さ7.6ｍ・7.8ｍ・長さ95ｍの水路トンネルを切り石とレンガで築き、その上に高さ33m・長さ80mの土盛りで築堤し線路を敷設した。延べ30万の人によって僅か1年9カ月で完成させた。

開業当初の時刻表（明治19年）

	駅名	直江津発	高田発	新井発	関山着
上り車	午前	7時00分	7時20分	7時55分	8時40分
	午後	3時30分	3時50分	4時25分	5時10分
下り車	駅名	関山発	新井発	高田発	直江津着
	午前	9時00分	9時40分	10時10分	10時30分
	午後	5時30分	6時10分	6時40分	7時00分

田切工事碑」が建立された。（斜め向かいには、昭和二一年、雪崩による築堤決壊で旅客七名、職員四名が死亡した事故の碑が建立されている）

驚くのは、死者七九名のうち、十六名が事故死であるのに対し、六三名がコレラによる死者だったことである。

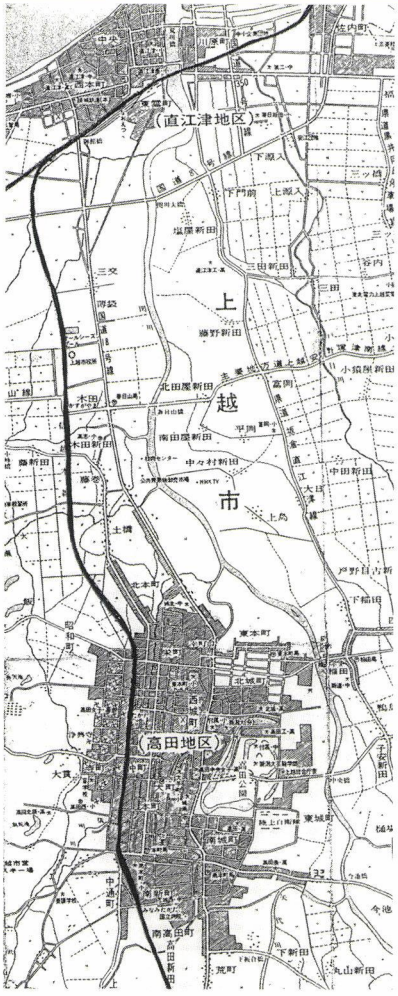
明治十九年は全国的にコレラが流行し、直江津の真行寺の記録でも町内の三寺院だけで二四〇名の死者を記録し、火葬場が間に合わず、善光寺浜一帯は昼夜を分かたず火葬の煙が上がっていたという。

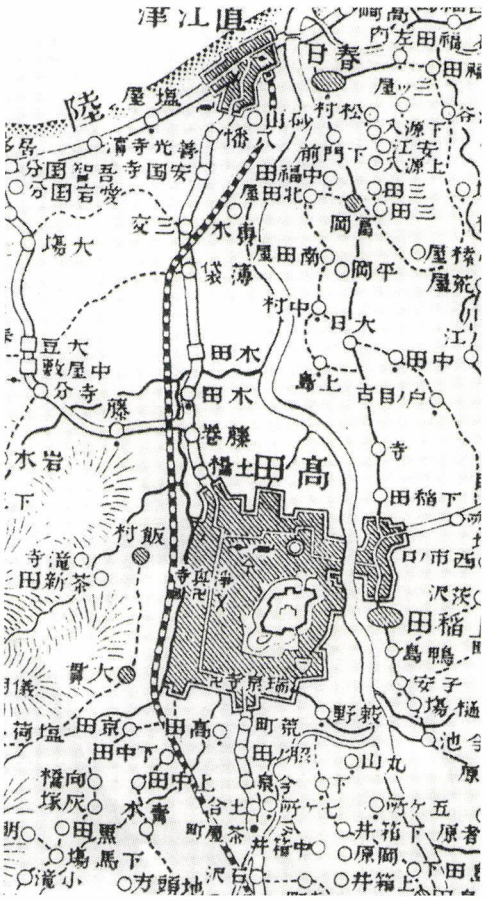
鉄道忌避伝説

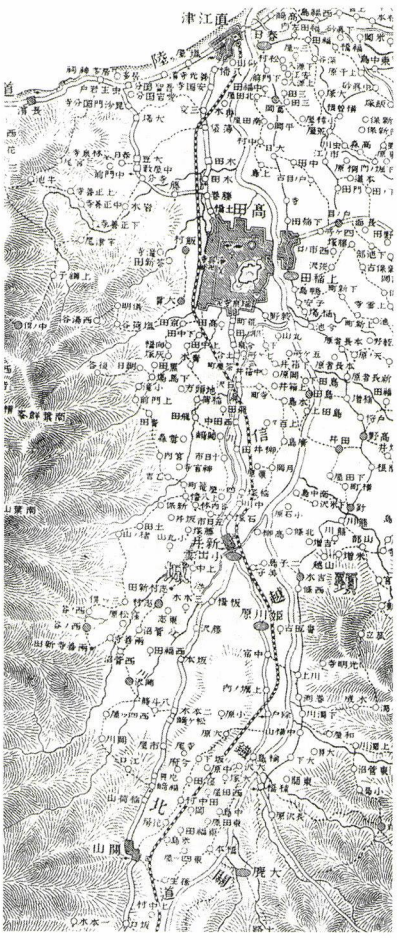
今でも駅が不便な場所にあったり、あるはずの町に駅がなかったりする理由付けとして、宿場が寂れるので駅を設置させなかった、郊外に移させたなどの昔話が各地に残っている。市町村史にも記録されているが、言い伝えを集めたに過ぎず、確証がないため「伝説」と言われるようになった。

実際には、城下町のような場合は市街地の変更が困難、市街地では列車が加速するための直線が取れないなどの理由によって、町外れに置かれたと言われている（高田や長岡のような例外もある）。また、用地の寄付や地価の安いところを通した場合もある。忌避とは逆に〈我田引鉄〉といわれる例もあったようだ。

輯製二十万分一図　明治20年輯製製版
（平凡社「日本歴史地名体系」特別付録より）







右　除戸・原通ルートは沿線住民の反対で変更になった。妙高高原駅も関川に設置する予定が、宿場の衰退を懸念して反対され現在の位置になったと言われている。

中　斜線の部分が高田市街地　線路が市街の西外側にとられている。

左　直江津から左へ、北本町の町並みに並行して市街地に入っている。

この年の五月、村松三十連隊にいる許婚（いいなずけ）に会うため、徳島から海路直江津港に上陸した母娘がコレラに感染（二人とも死亡）していて、二人が直江津にコレラを持ち込んだのではないかと伝えられている。直江津から鉄道によって大田切の工事現場までコレラ菌が運ばれたのかもしれない。

この〈田切〉で記憶に新しいのは、昭和五二年五月の新赤倉の土石流災害である。白田切の築堤が破壊されて線路が宙吊りになり、五ヶ月間にわたって関山―妙高高原間のバス代替運行がおこなわれ、少し位置を変えて橋梁によって復旧した。

明治二十年、参謀本部陸軍部測量局（後の陸地測量部）発行「輯製二十万分一図・高田」を見ると、不思議なことに高田を通過する路線が浄興寺の裏側に描かれており、新井からは大きく東へ迂回し、飯山街道に沿って除戸から原通を経由して関山に至っている。（直江津から三交までは、駅の位置が変わる等で三度の変更）

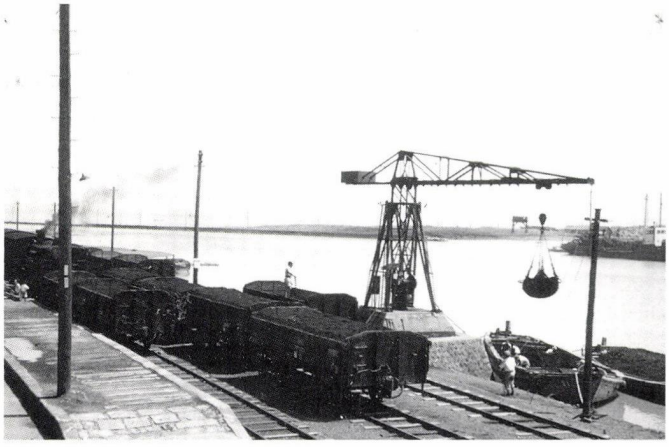
明治十九年には現在のように鉄道が敷かれているので、地図は何らかの事情で計画路線のまま発行されたと想像できる。しかしルートの変更は何を意味するのであろうか。

当時、煤煙・火の粉による火災・振動などで沿線の安全や田畑への被害が出るといわれ、反対や郊外への移転運動〈鉄道忌避伝説〉が起こったと言われている。

高田のルート変更は、田園地帯を避けたのか、逆に市街地へ入れて発展を図ろうとしたのか、今となっては謎である。（地図は明治三二年までそのまま改定されなかったようだ）

思い出の風景





上　貨車と蒸気機関車の後部と煙が見える。左の建物は高助(名)。
下　クレーンで艀から石炭を揚げる。

高助合名会社所蔵

長く〈浜線〉として親しまれた荒川（関川）西岸の線路は、信越線敷設の資材陸揚げ用に、現在のＪＲ荒川鉄橋付近まで敷設されたものである。この線路のために、明治31年の荒川鉄橋落成によって駅が現在地へ移転するまでは、直江津駅も関川と並行に設置されていた。

明治26年、工事用だった路線を港の荷役用として充実させるため、永代橋（安寿と厨子王供養塔付近）の下流を埋め立てて桟橋を設置、33年から〈浜線〉として供用され、昭和5年4月に直江津港駅が開設された。

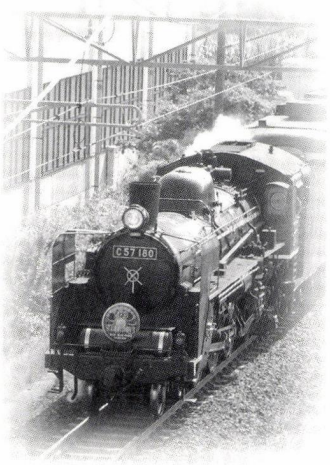
写真は昭和30年代前半の浜線、直江津港駅付近の風景である。このあたりは関川改修で拡幅され川の中央部になっている。

現在の路線は直江津方向から見て、少し左へカーブしながら高田へ入っている。市街地の部分は、高田藩の縮小で屋敷地が耕作地に変わっていたところである。

もし地図のように浄興寺裏を通り駅も設置されていたら、高田はどのように変貌し寺町の景観はどうなっていたか、興味深い。

鉄道は沿線に大きな経済効果をもたらしたが、一方で中央への人材の流失、労働力の供給基地化という側面も生んで、明治末には、多くの識者が指摘するところとなっている。

開業が目前になった北陸新幹線は、経済効果をもたらすのか、再び人材流失を招くのか……。



●金谷山グラフティー

思い出のジャンプ台



JCV くびき野みんなのテレビ局
市民ディレクター
川島　秋男

今でもほんの一瞬だが、突然鮮やかに蘇る風景がある。そして、そこにいる自分が……。

まだ除雪もしていない道を踏みしめながら、金谷山の方へ向かう大勢の人々……。急斜面を滑り降りてくる黒い点、そして宙に飛び出す影。喚声と拍手。山々にこだまするアナウンスの声。時々聞こえる救急車のサイレン……。それは、暗く寒い冬の白と黒だけの世界に、一つの輝きと心ときめかせる一瞬だった。

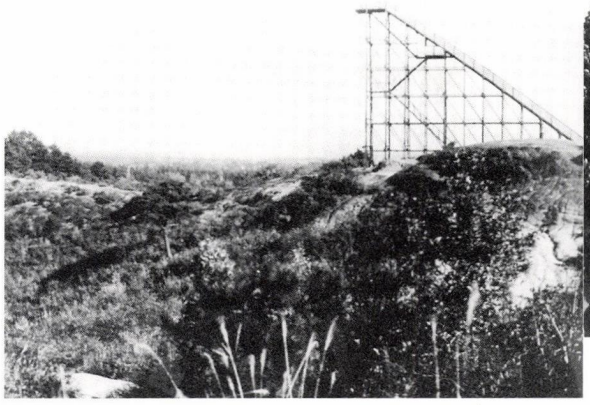
ある日、新聞を見ていると、毎日見ているはずなのに、なぜか郷愁を誘うきれいな金谷山の挿絵があった。そこには紛れもない東洋一のジャンプ台があった。

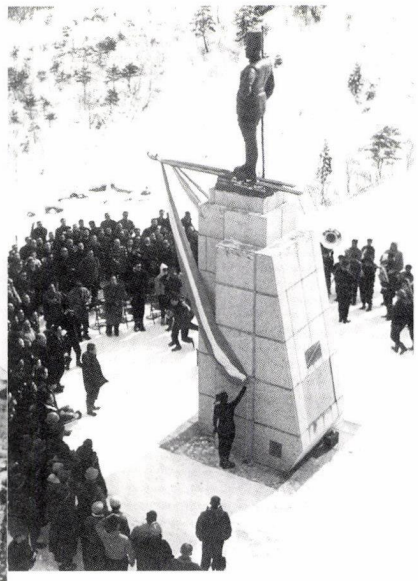
これがきっかけになって、私は、その思い出を辿ることになった。JCV、上越ケーブルテレビの〈くびき野みんなのテレビ局〉に市民ディレクターとして参加している私は、それをテレビ番組という形で残したいという思いを募らせるようになった。

金谷山は毎日のジョギングコースだが、その日からは、不思議なもので、いつもとは違う風景がそこにあった。

明治四四年、オーストリアから軍事研究のために高田にやってきたテオドル・エドレル・フォン・レルヒは、スキー技術を伝え、金谷山は日本スキー発祥の地となった。

前ページ　ジャンプ台完成直後の昭和26年。





右上　レルヒ像　スキー発祥50年祭に建立。
昭和36年1月12日の除幕式。
上　完成直後のジャンプ台。
右　思い出のジャンプ台は撤去され、昭和58年オールシーズンジャンプ台に変わった。



今、レルヒ少佐の銅像は金谷山のシンボルとして、毎日、高田の街を見守るように立っているが、かつて、そのレルヒ像と並んで、どっしりとした鉄骨のジャンプ台が聳えるように建っていた。

しかし幼年時代の記憶である。はっきりとした形にならない。思い出の中にあるジャンプ台を何とか見える形にしたい。何か情報は無いかとすがる思いで、金谷山で旅館を営む星野さんを訪ねた。

突然のことにも関わらず、ジャンプ台の建設時までさかのぼって、当時の貴重なお話をうかがうことができた。

ジャンプ台建設現場視察のために、岡田正平初代（民選）新潟県知事が、星野さんの旅館に泊まったこと、そして、戦後の復興期で、将来のことなど考える余裕もないのに、知事が地域の将来の展望を語ってくれたこと、森永製菓が大会の資金援助をしてくれ、メーカーの看板を星野さんの敷地に建てたことなど、目を輝かせながら語ってくださった。

高田のシンボル、そして東洋一のジャンプ台から最初に宙を舞った人は、霜鳥敏雄さんであった。現在寺町にお住いである。星野さんの紹介で、霜鳥さんにお会いして当時のお話をうかがうことができた。

大会に向けてジャンプ台の整備に参加していた市民の間で、不満の声が漏れてきた。

「整備ばっかしてんな　おら　やだでや」

「誰か飛んでみれや」

「こんつぁどこ　飛ばれるもん　いんなかや」

そのとき、

「よし！　俺がやる」

と、言ったのが霜鳥さんだった。

霜鳥さんは当時地元でも有名なジャンパーだったが、東洋一のジャンプ台は、技術的にも難しいジャンプ台であった。そこを初めて飛ぶには、かなり気合がいったに違いない。

多くはジャンプを初めて見る人たちであった。霜鳥さんのみごとなジャンプに喚声もな

く、ただ度肝を抜かれたように息を呑み、ブレーキングトラックを滑走する霜鳥さんを見つめるだけだったという。

この光景は、当時の新聞に載るほど話題になった。

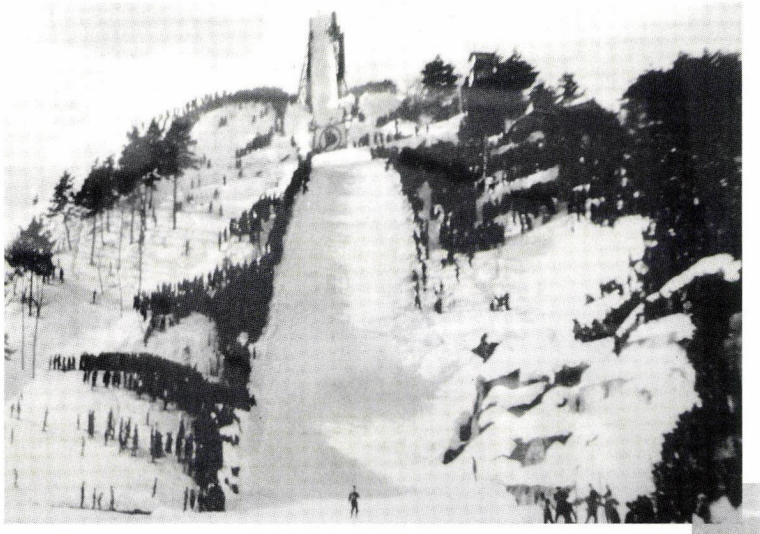
星野・霜鳥の両氏に出会えたことは大変幸運なできごとであった。

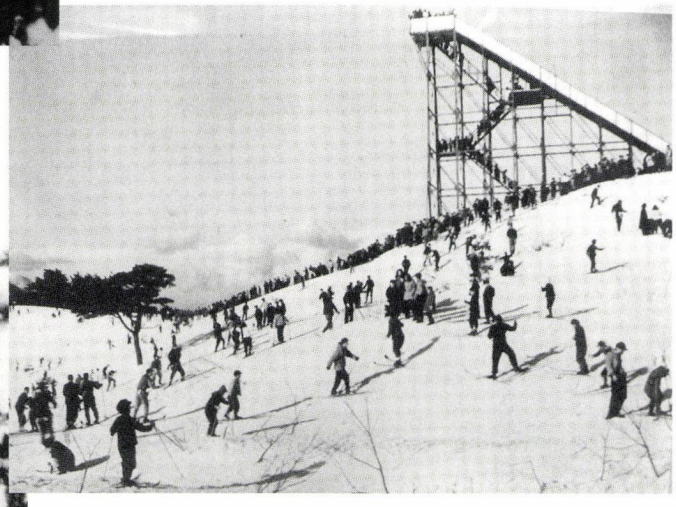
次にジャンプ台の資料を求めて日本スキー発祥記念館を訪ねた。

あった、あった。当時のジャンプ台の写真が展示されている。昂ぶる気持ちを抑えながら近づくと、大勢の観客に取り巻かれるようにして聳え立つジャンプ台の雄姿があった。

昭和三十年代のモノクロ写真に豆粒のように写る観客。そのどこかに、父親に手を引かれた四十年前の私がいないかと探すうちに、幼い日の私の目に焼き付けられた、ジャンプ台がはっきりと蘇ってきた。

突き抜けるように冬の空に向かって聳えるジャンプ台。飛び出すジャンパー。それは雪に閉ざされた暗い冬の思い出のなかで、幼い私に、ひときわ輝いて見えたのだった。







上　一番心に残るジャンプ台の風景。昭和 26 年に完成したが、2 月の国体は雪不足で中止になる。その直前の写真。
右　迫力あるジャンプ台を背にスキーに夢中になる子どもたち。
下　昭和 36 年の第 16 回国体。
谷底に落ちていくようなジャンパー

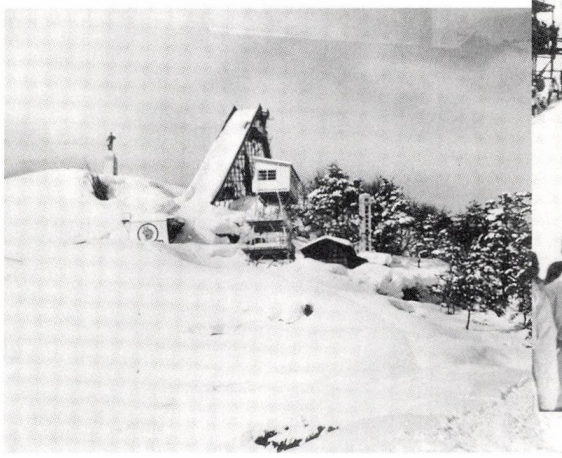
撤去されたジャンプ台の名残か



この県営金谷山シャンツェは、昭和二六年二月開催される第二九回全日本スキー選手権大会兼第六回国体のために、新潟県と高田市が、四二六万七千円という巨費を投じて建設したものである。設計は桑原測量社長桑原清

右　第16回国体　レルヒ像も見守る。
下　整備を待つジャンプ台。









上　空へ飛び出すジャンパー。
左　昭和39年　第36回国体開会式。
陸上競技場に大勢の観客が詰めかけて開会式が行われた。当時の市民の期待が感じられる。

作氏、施工は飯塚組（現飯塚組建設）だった。どちらも地元高田の会社である。

昭和二五年十一月竣工（二六年一月完工式）したジャンプ台は、その規模の大きさから〈東洋一のジャンプ台〉と賞賛され、市内全域から望むことができ、スキー発祥の地高田のシンボルと呼ぶにふさわしいものであった。

この年の二月に開催される予定の初の大会は、雪が解けて中止になったが、

二九年　第三二回全日本スキー選手権大会
三五年　第三八回全日本スキー選手権大会
三六年　第十六回国体
（一月、スキー発祥五十年でレルヒ像建立）
三九年　第十九回国体

と、数々の大会が行われ、全国的にスキー発祥の地の名とともに知られることになった。

当時、海外でしか見られなかった巨大な鉄骨のやぐらを組んでアプローチを造り、斜度三五度という日本最高の急斜面と、高度な技術を要する短いアプローチは、飛距離六〇メートルを目標にした。

また、多くのシャンツェが街から離れた所にあるのに比べ、市街地から数分で行ける点も特徴のひとつであった。

カンテ（踏み切り）が高いため飛行曲線も高くなり、急角度で落下していくジャンパーは恐怖との戦いだったと言われている。

参考資料　「高田市史」（昭和三三年）
資料提供　日本スキー発祥記念館

日本スキー発祥記念館

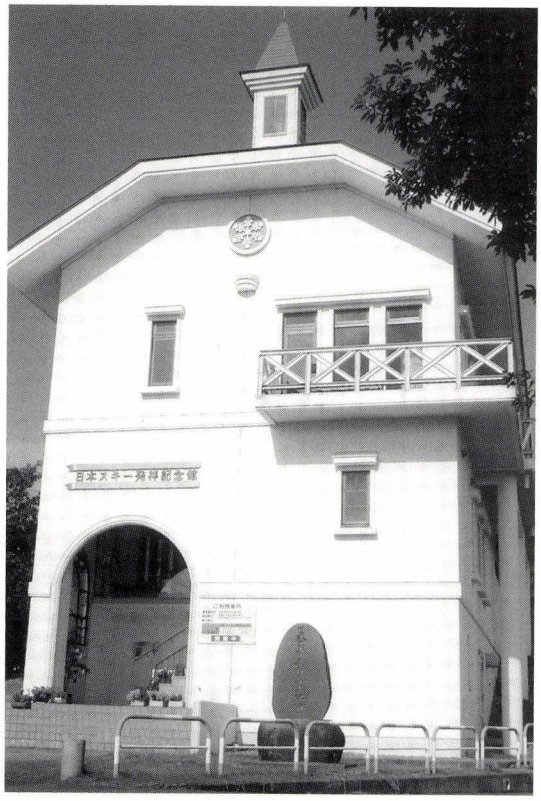
オーストリアの軍人、テオドール・フォン・レルヒ少佐は、日露戦争で大国ロシアに勝利した東洋の小国、日本の陸軍を視察するため高田の第十三師団に派遣されました。

そのレルヒが、明治四四年（一九一一）一月十二日、歩兵第五八連隊第一大隊雪中演習所（現城西中学校）で初めてスキーの指導をしたのが、日本のスキーの始まりです。

レルヒは軍事目的だけではなく、スキーのスポーツとしての楽しさも伝えました。師団長の長岡外史は、それに着目して市民、学校などでも講習会を開き、スキーはまたたくまに全国に普及し、国民的なスポーツに発展しました。

資料館では、このようなスキーの発達史やスキーに関する資料、レルヒの功績を展示する他、スキーシミュレーションのコーナーもあります。

上越市大貫（金谷山）
電　話　025－523－3677
開　館　月曜および祝日の翌日、年末年始
入　館　一般300円　小中高100円
問合せ　上越市文化振興課
電話025－526－5111





レルヒが迎えてくれる

スキーの体験もできる





オーストリアのレルヒ邸を再現

この人に学べ

室孝次郎

家産を費やし 時代の扉を開けた人



写真　大正三年版高田市史より

室孝次郎の一族

上越の近代に大きな足跡を残した室孝次郎の先祖は、寛永元年（一六二四）松平光長に従って越前北ノ庄（福井市）から高田に移り、本誓寺町（東本町四）、鍛冶町（東本町五）に本家藤屋を中心に分家が軒を並べる豪商であった。天保十年（一八三九）本家藤屋、方文と加寿の長男として孝次郎は生まれる。

その孝次郎を語るために忘れてならないのは倉石家である。両家はほとんど一家と言ってよいほど深い姻せき関係にあった。

倉石家は、上杉謙信の招きで佐内（上越市）に寺地を定めた本誓寺に従って来た人たちである。高田開府で下小町（本町六）に移り、酒造業を始めたのが本家〈中の倉石〉で、後に上と下の二家が分家し、上の倉石は〈角の倉石〉と名乗り、手広く商売を行い本家と共に町年寄りも務めている。画家倉石米山・乾山はこの倉石家の出である。

〈角の倉石〉はさらに分家し、〈笹屋〉からは本居宣長の高弟倉石為光、〈福島屋〉からは初代高田市長倉石源造が出る。笹屋倉石は中国語学者・中国文学者倉石武四郎博士（伊勢屋出）が名跡を継いでいる。下の倉石〈伊勢屋〉は、家業の傍ら学問や風雅の道を嗜む家柄であった。四代目は茶人で茶道に関する著述もあり、五代目の甕守（みかもり）も茶人であり歌人であったが、「万葉集」の注釈を収集して独自

の解釈を施した「万葉集書緝籠（かきつめこ）」二四巻を残した。今日の「万葉集」の訓みに、すでに甕守が解釈しているものがある。

甕守の弟直輔も学問を好み、後に高田の伝説的書肆「室直」を呉服町（本町三・大山菓子店のあたり）に開業する。直輔は「梁塵秘抄」の最も重要な部分である〈巻第二〉を所持し、転々とした後、偶然にも佐々木信綱の手中に収まり、世に出たという逸話がある。

直輔は孝次郎の父方文と親しくし、妹の智久の婿となり室姓を名乗る。

もう一人の弟、倉石侗窩は安積艮斉に学んで江戸で塾を開いた。後に招かれて昌平黌の教授になったが、天保十二年に帰郷して私塾文武済美堂を開く。科目は「春秋佐氏伝」を中心とする儒学と兵学であった。（下って明治六年、英語、数学、物理なども加わった）幕末・維新の人材を多く輩出し、越後の松下村塾とも称された。前島密、増村朴斎、瀬尾玄弘なども卒業生である。

明治元年、迎えられて藩校修道館の副督学となる。六五歳で生涯を終えた。

文武の道を学ぶ

右のような優秀な血族と恵まれた経済、手を伸ばせば、そこに万巻の和漢の書籍があり、風雅の世界に浸ることもできる。このような中で育った孝次郎は、九歳の弘化五年（一八四八）、叔父侗窩の文武済美堂に入門する。

孝次郎の入門の翌年、後に勤王の同志となる小猿屋村の笠松宗謙が入門して来た。

叔父直輔について和歌も学び、十五歳になると倉地正久に直心影流の剣術を学んでいる。

安政五年（一八五八）、江戸遊学を志したが父の死で断念し、家督を継いで結婚した。

当時、上越には三上則義、富永春部などの国学者がいて、長州出身の国学者近藤芳樹も何度か上越を訪れ、二一歳の孝次郎も近藤の門に入って律令制度を学んだ。これが孝次郎を勤王の志士へと奔らせることになった。

勤王の志士として奔走

元治元年（一八六四）の蛤御門の変（禁門の変）以来、孝次郎の勤王への思いは高まって行くが、家業を継ぐ者として家を離れるわけに行かず、笠松宗謙、井田年之助（直江津）を始めとする越後国内外の同志と連絡を取り、家に泊めては時局を論じ、資金不足の者には金を与えて活動を支えた。

この年の暮れ、水戸天狗党の乱で敗走する武田耕雲斎らを海路京都へ送ろうとして笠松宗謙と謀り、長野まで出向いたがすれ違ってしまった。（耕雲斎らは敦賀で処刑）

慶応二年（一八六六）ようやく上京して有

栖川宮や西園寺公望に会い、多くの勤王の志士と意見を交し、翌年も正木小七郎と名前を変えて上京している。

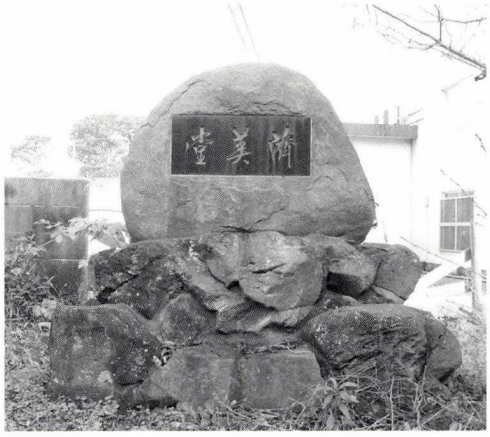
慶応四年、大政奉還、王政復古と時代は大きく動いていたが、高田藩は勤王か佐幕か態度を明確にできないでいた。その中で、孝次郎はいち早く方義隊を組織し倒幕に備えた。この農兵隊は後に中越の農兵隊と合併し居之隊となり、孝次郎は上越の隊長に就任した。

北越戊辰戦争

明治元年五月、奥羽越列藩同盟に長岡藩が参加して新政府に正面から反抗、北越戊辰戦争の火蓋が切られた。孝次郎は北陸道鎮撫総督軍兼会津征討総督軍参謀の山県有朋・黒田清隆を高田に迎えて作戦について建言し、黒田の隊に属して直江津から柏崎へと転戦することになった。七月には、会津征討越後口総督の仁和寺宮から北陸道官軍御用掛を命ぜられ親兵隊に属している。長岡城が落城すると、新発田から会津へ転戦し負傷も負った。このとき孝次郎は二八歳であった。

明治二年、明治政府は維新の働きに対して孝次郎に褒賞を与え、西園寺公望は、孝次郎にヨーロッパ視察の随行と留学を勧めたが、孝次郎は家業を考えて果たせなかった。





左　直心影流鹿島神伝十六代　倉地正久
　　大正三年版高田市史より
下　文武斎美堂の碑　上往下橋畔

地域貢献と国政と

明治三年、高田藩は藩政改革で、孝次郎を二〇石五人扶持の武士待遇で聴訟断獄掛（軽犯罪の裁判官）に就けたが、辞して藩校修道館の皇学講義方兼漢学助教になり、明治五年まで勤めた。その後、地租改正による地券交付のため、柏崎県の地券取調幹事に就任した。

明治八年、旧藩医藤林玄仙等が病院の必要性を痛感して藤林邸内に回春病院を開くと、倉石侗窩と協力し寄付金などの援助に努め、組織も変え名称も高田病院として取締役に就いた。県立高田病院の前身である。

明治十一年、高田・新井・中郷・直江津を束ねる第八大区の区長に就任し、高田学校（高



井田年之助肖像
直江津の人。維新に奔走し、明治５年わずか 27 歳で死去。三八市通りと新町通りの角に「井田年之助宅跡」の碑が建つ。

田高校の前身）の校長も兼任した。十二年に郡区制の改正で、初代西頸城郡長に就任している。

校長時代、憲法や議会を論ずる〈益進会〉を組織し政談演説会を開いた。これが新潟県における演説の始まりだと言われている。

この間、明治五年に維新の同志笠松宗謙は三五歳、井田年之助も二七歳で相次いで世を去った。二人とも国事に奔走し家産をすり減らしたが、年之助は「天下の仁人は天下の仁人を知る。天下の義士はよく天下の義士を知る。吾はただ吾が分を尽くすのみ」と語ったという。

孝次郎の功績として特筆されるのは、信越線敷設に多大な貢献したことである。

いち早く、高崎への私設鉄道を考えた矢沢綱四郎（大貫村）の遺志をついで、六百余名の出資者と一三〇万円の資金を集めて政府に許可を願い出たが、国営で敷設することになり却下された。しかし、中山道線の変更による関山以南の敷設消滅の危機を救ったのは、孝次郎等の強力な運動があったからである。

孝次郎の国政への参加は、明治十四年、鈴木昌司、八木原繁祉（しげとみ）らの頸城自由党に参加かしたことに始まる。翌十五年、上越の立憲改進党を結成し幹事に推された。このころ「高田新聞」創刊にも尽力している。

明治二三年、第一回衆議院選挙から四期連続当選したが五回目は落選、次回帰り咲いた。その間の三十年には、愛媛県知事に任命されて兼任している。

明治三六年六月二一日、過労から六四年の生涯を終えた。

孝次郎は、その生涯で父祖伝来の家産を費やした。

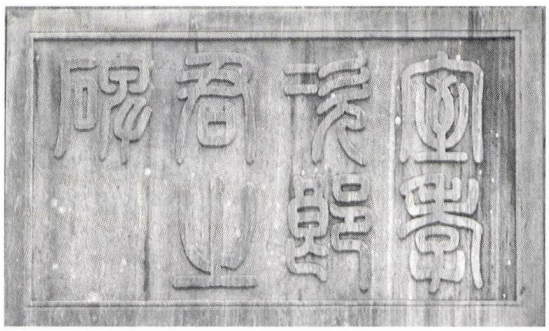
曾孫室京子は「ふるさとを捨てた一族」で、以下のように書いている。

……叔父が「孝次郎じいさまは政治活動とはいえ、室家の財産をすべて使い果たしてしまった。やりすぎだよ」と言っていたことが耳に残っている。

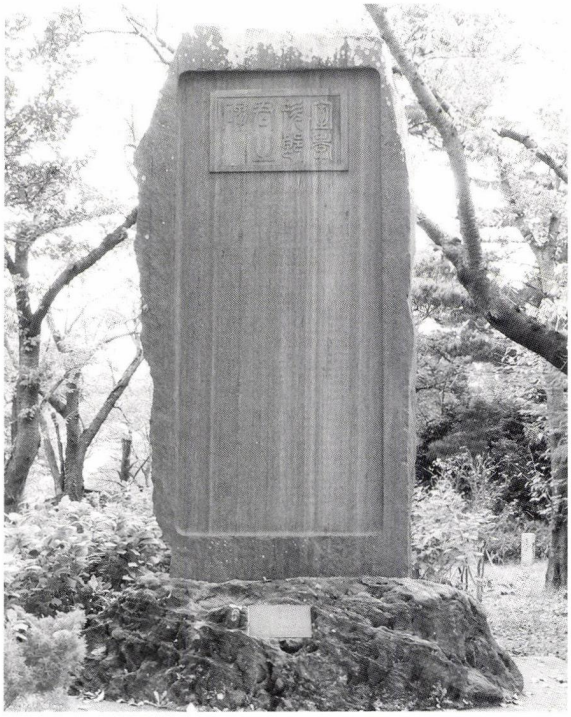
……孝次郎翁は、室家に代々伝えられていくべき家系のエネルギーを異常なまでに放出してしまった。この人物はあまりにも偉大すぎたのだ。青年期から初老期まで東奔西走、絶大なエネルギーで政治活動に没頭し、室家のすべてを一人で使い果たしてしまった。どこの家系でも、先祖にとび抜けた傑物が現れると、子孫は衰退するようだ。（普及版・上越市史より）

明治三八年、篆額大隈重信、撰文報知新聞主筆矢野竜渓で巨大な顕彰碑が建立された。

弟貞蔵は昌平黌を出て孝次郎とともに活動したが、維新後は新天地北海道に渡り、明治七年、三一歳で亡くなった。



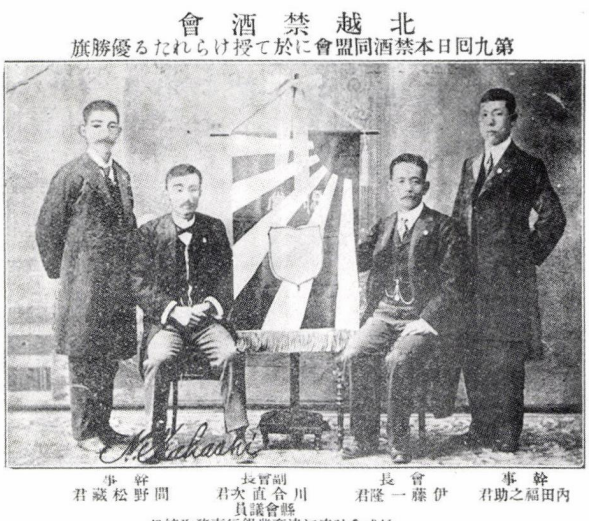
大隈重信揮毫の篆額



室幸次郎顕彰碑
当初寺町の善導寺境内に建てられたが、高田公園の博物館脇に移転されている。

■参考資料
頸城人物百年史・頸城編
新潟県社会科教育研究会
高田市史　大正三年版
高田市史　昭和三三年版
普及版　上越市史
続じょうえつ市の郷土史散歩
渡辺慶一
萬葉の香　伊丹末雄

禁酒の人々



県内の名士の写真を掲載し、明治41年に発行された「新潟県官民肖像録」の写真である。

これを掲載した理由は不明であるが、「北越禁酒会」が第九回日本禁酒同盟会で優勝旗が授与されたときの記念写真と思われる。

右から二人目の伊藤一隆は、エドウィン・ダンが直江津に開設したインターナショナル石油工場の総務部長として招かれた人である。伊藤は札幌農学校の一期生で、北海道の水産業に貢献している。また校長のクラークの教えを受け、明治31年に発足したキリスト教系の日本禁酒同盟会副会長に就任している。撮影時期はインターが日石に売却（伊藤も日石に移る）される明治40年と思われ、伊藤は北越禁酒会の会長をしていたことが分かる。右から三人目の人物は副会長の川合直次。直江津の資産家の家に生まれ、高田市長となる。文芸に秀で文人市長と言われた。当時の肩書きは県会議員、直江津商業銀行専務取締役。（本誌23号「この人に学べ」参照）

両わきの幹事、内田福之助、間野松蔵については不明。ご存知の方はご教示願いたい。

カメラの眼

秋まちなか点描

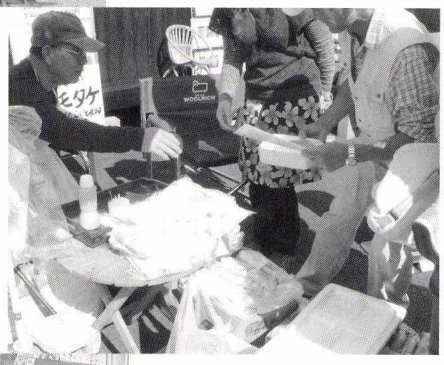
十月十四・十五日、新潟県鉄道発祥の地一二〇年を記念して、直江津駅前を中心にして盛大に行われた。大人気のミニSL、アートフェスティバル、互の市、ストリートダンスなど終日にぎわった。

二十八・九日は、高田本町通りで「越後・謙信SAKEまつり」が行われた。上越地域の清酒・ワインが集合し、利き酒や販売で賑わった。





人気のミニSL

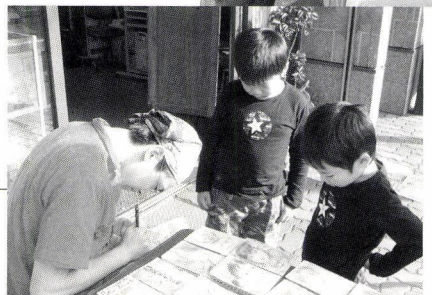


珍しいマコモダケの販売



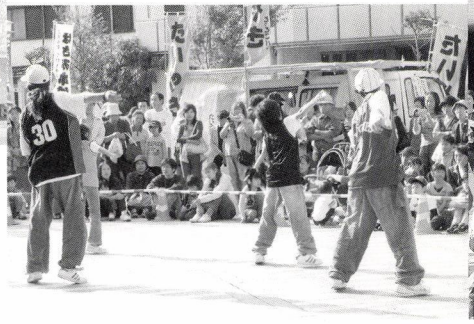


あおその会の実演





おしゃれな店も

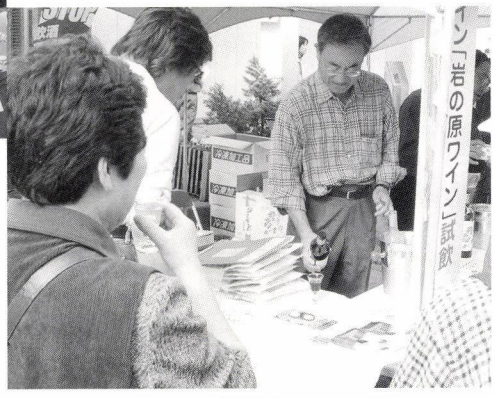




ストリートダンス

SAKEまつり





社長自らサービス



人気のコロッケ



試飲が大人気

建物さんぽ

その四　侍屋敷の心得

「高田に無量庵という古いお屋敷があるので、調べてみてはいかが」と言われ、上越市創造行政研究所が行った歴史的建造物調査の市民研究員として、予備知識もなくお尋ねした。傍らに建つ和裁学院の呼び鈴を恐る恐る鳴らして、出てこられた奥様に早口で事情を伝えると、

「いいわよ。日曜日にいらして」

という気さくなお返事に緊張がほどけたのは、六年前のこと。

現在の大手町、西城町界隈は、江戸時代に侍屋敷が集中した「家中」である。子供の頃から、木々に囲まれた古くて大きな家があるところだった。門構えも庭の風情も、奥まった玄関も風格が感じられて、良好な住宅街の景観として注目していた。その中に、小さくはあっても、本物の侍屋敷が残っていたとは。約束の日には、お玄関から招き入れていただいた。

簡素な構えの平屋で「変形田の字型」の和室の南北に縁があり、南に前栽、北側が主庭。柱や床脇天袋の土壁は江戸時代のままと聞く。通常の「田の字型」は民家の定型であるが、一間ずれた「変形田の字型」は、接客や冠婚祭事での使い勝手がよい。普通の家よりも床が低くて屋根も平べったい。

「高田のお城は石垣でなく、土塁の上に立てられていたから、お殿様より高くしてはいけない。床下に賊が忍ばないように床は低くて、外壁も真っ黒に塗っていた」

というお話に、江戸時代の武家の心得がしのばれる。

ご主人の佐藤さんにこの建物「無量庵」の由来を伺う。もと漢学者の住まいを昭和初期にご先代が購入して、住居として使われてきた。昭和六十一年の豪雪で建物の東側が倒壊した。この機会に撤去しようと覚悟を決めて、別れの茶会を催した。その時、偶然に居合わせた、上越教育大学の小木新造さんに諫められた。

「こういう建物を壊してはいかん」

住まいは敷地内の別棟に移した。壊れた台所と風呂場はあきらめたが、母屋はできるだけ保存し、不便な所を手直ししながら、和裁学院の行事やお茶席、展示会に丁寧にお使いになっている。

戦時中には、東京を逃れて池の平に滞在していた尾崎行雄が、家族同伴でしばしば滞在し「徒に人間の価値を量ってはならぬ」という願いをこめて、

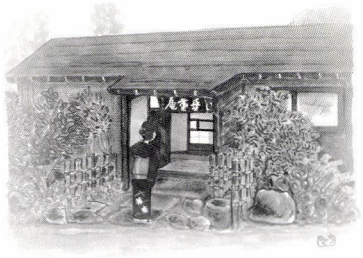
無量庵

の銘と額を残した。佐藤ご夫妻はその心を受け継いでいる。戦中、この広い敷地は農場や薬草園となり、九十歳の母上は、石混じりの硬い土を鍬で耕したと語ってくださった。

お座敷にひとり坐して、静穏のひと時に包まれる。既に百五十年あまりの時を経て、柱も古い建具も自然に返っている。床の軸も香炉も屏風も、あるべくしてそこにあり、無作法な珍客にさえ、懐深く無言のうちに語りかけてくれる。時は、止まることなくゆったりと流れている。遠い昔より、ここに侍家族の生活があり、戦争をはさむ社会の変動があり、厳しい風雪に洗われてきた。

これがご縁になり、友人とのささやかな展覧会にも使わせていただいた。最近では、お花見の季節に甘味処「あわゆき亭」を開かせていただき、普段は仕事に忙しい女性たちも、ここでは侍屋敷のお女中に変わる。

ご厚意に感謝し、末永く無量庵の心が生き続けることを祈る。



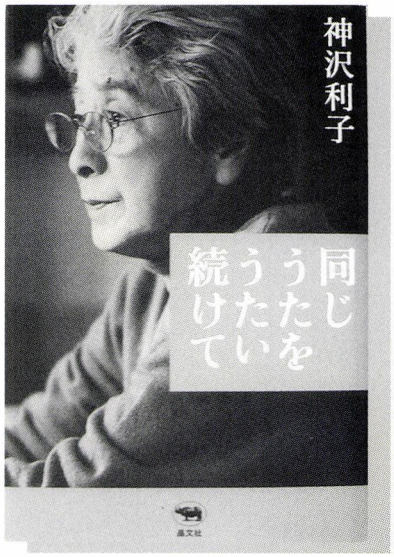


罌堂・尾崎行雄
神奈川県生まれ。（一八五八―一九五四）九六歳。
護憲・民主政治に一生を捧げた政治家。「憲政の神様」と呼ばれる。
罌堂が滞在した池の平の山荘は、女婿佐々木久二が、若者たちのために建てたスキー旅館「楽山荘」。後に「罌堂庵」と改称し東京ＹＭＣＡに寄贈され「東京ＹＭＣＡ妙高高原ロッジ」となる。
（「越後の里から」星野達雄）

小木新造　上越教育大学教授を経て江戸東京博物館館長等を歴任。

文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

■読書びと



同じうたをうたい続けて

神沢 利子著

晶文社刊
一九〇〇円(本体)

小学生の頃、姉の持っていた「世界少女小説全集」中の『銀の指ぬき』という作品が気に入っていた。一九三九年にニューベリー賞をうけ、〈古き良き時代〉のアメリカ中北部にある農村の少女が家族、友人と過す、輝くような（ときには厳しい自然に翻弄される）ひと夏の日々を描いたエリザベス・エンライトの小説である。堀口香代子の新訳『ゆびぬきの夏』（ベネッセ・一九九〇）を見つけ、昭和三十年代の暑い直江津の空を思い出しながらなつかしく読み返した。

私が身辺一冊の本としている神沢利子の自伝的作品『流れのほとり』（福音館文庫）の読後感も同様で、珠玉という言葉そのままに「至福の幼年時代、金色に輝く時」を遠いサハリン島のきらきら光る川の風景に沿って語り伝えている。

神沢利子は、一九二四年九州戸畑に炭鉱技師の家に生まれ、『いないいないばあや』に描かれた二年間の札幌暮らしをへて、五歳の時に当時日本領であった南樺太へ一家をあげて移住する。女学校二年の夏、一九三八年に上京、病を得ながら、西村伊作の文化学院へはいり、同人誌で鮎川信夫、田村隆一らと詩を書く。戦時下に同級生だった古河俊造と結婚、二人の娘を儲けるが、敗戦後結核の再発、夫との愛憎生活のはてに童話作家の歩みをはじめ、病床に腹ばいで書き紡ぐ日々のすえに、トナカイを飼う北方民族の少年『ちびっこカムのぼうけん』（理論社）で児童文学作家として自立した。

七二年に刊行された代表作「銀のほのおの国」（福音館文庫）は、壁の向こうの異境へ引きずり込まれた兄妹が〈受難から甦ったトナカイの王と邪悪な狼の世界との戦い〉に立会う物語である。プロットはC・S・ルイスのファンタジーと重なるが、原罪と赦しの間に惑う擬人化された動物達の複層的な心理描写に、市井の生活を貫いてきた神沢の、信仰を超えた勁さを見る。

「――いまはただ、わたしのかくもの、かいたものが、こどもたちのいのちの火に風を送る、鍛冶屋のふいごの役をつとめるものでありたいとねがっている。」と結ばれる『同じうたをうたい続けて』は、二〇〇六年六月に上梓された。

パトロネージュ精神を貫いた社主中村勝哉と目利きの編輯者達により、闊達に時代を記録してきた晶文社らしさの香る〈雑文集〉である。

串田孫一編輯の瀟洒な雑誌『アルプ』に発表された、北辺の記憶を綴る散文詩のような小品群。一九七〇年前後の政治の時代、娘たちに導かれ学園闘争や赤テントの舞台に揺れる日々の回想。そして神沢の小さな庭に集う虫と花を二色の筆で画いた一六頁の画文集等、半世紀の歩みを伝法で破天荒ともいえる言の葉で織成す。

集中の絶唱は、『枯野の母』と題された一文で、同性として生涯葛藤した母を、〈ひいばあ〉と呼ばれる自身の老境より懐かしく追慕する。明治の女として不器用で頑な一生だった母に訪れた、「天からの贈物のような、ただ一度の美しい夏」を描く神沢の文章が胸を打つ。夫不在の二十年来の留守宅生活を遁れて、『ハイジ』に憧れ五人の子どもと過ごす昭和十五年の信州蓼科高原の貸し別荘暮らし。吹き渡る風と松虫草の花を背景に麦藁帽子の母の面影が偲ばれる。

『ちびっこカムのぼうけん』の底抜けの楽天性を支えた柳蘭の咲き乱れる美しい北の島は、同時に拉致された朝鮮人やスターリン体制の『悲しみの島サハリン』（角田房子・新潮社）でもある。人間の汚濁と愚かしさを見つめ続けた神沢利子は、老後に得た豊かなゆとりの日々に北方モンゴロイドのふるさとを訪ねる旅を重ね、精霊の宿る自然を再確認するのだ。神沢の軌跡とも重なるいま一人の先達、松谷みよ子と共に、幼子の美と善の未来を守るこの麗しき婆たちの命燃やす日々にエールを送りたい。

（賑）

食

歳とりのご馳走

〈歳とり〉という言葉も消え失せてしまいそうだが、数え年のころは、新しい年を迎えれば自分の歳が一つ加わる祝いだった。

往く歳を振り返り、新たな歳の無病息災を願って神仏に参り、歳とりを祝ってご馳走を食べる。

ところが、所変われば品変わる……。東京で大晦日を迎えてショックを受けた人、何で前の晩からご馳走を喰ってしまうのだと思った人。しかし、このような違いへの驚きは、昔話になってしまった。

上越後でもさまざまな違いがあったはずだ。例えば、歳とり魚は鰤か鮭か、鮫が加わるか。大根膾はあるのか。元日の雑煮は鳥か魚か。

数えあげれば違いばかりだ。土地とちの風習は大切にしたい。





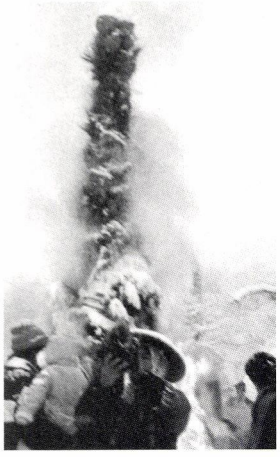


祭

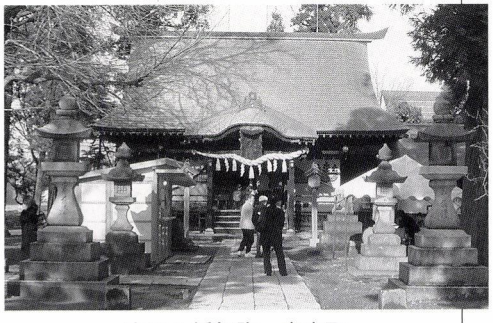
一月十五日は各地で小正月行事が行われる。

有名なのは、桑取の小正月行事、松之山の婿投げ・すみ塗り、青海の竹のからかい（国文化財）、能生白山神社のお筒がゆ等がある。

十七日には、能生藤崎、藤崎薬師堂の裸胴上げ、通称さっしゃげがある。

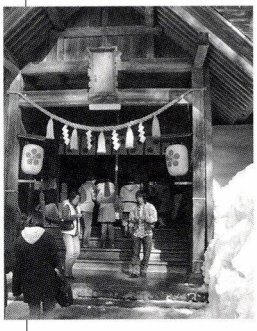


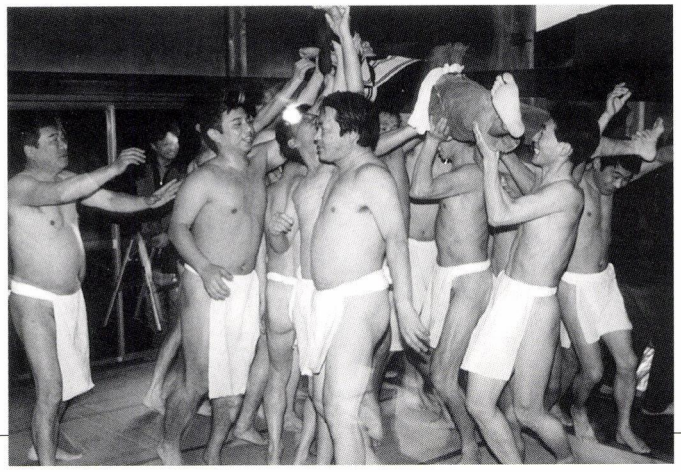
松之山
すみ塗り



直江八幡初詣　東本町

菅原神社初詣　清里区





藤崎薬師堂　裸胴上げ祭り

上越産業振興研究所レポート

明治の人が考えた地域振興

大正三年版高田市史付録「上越発展策」に見る

「上越発展策」

大正三年に刊行された「高田市史」は、高田の歴史を知る上で、今でも第一級の史料として高く評価されています。

著者の布施秀治は、現頸城区両毛出身で、高田中学で謙信文庫を創設、東京帝大史料編纂所、帝室編纂所で「明治天皇御紀」の編纂に携わった人で、執筆当時は高田中学校の教師でした。

刊行の前年は「高田開府三百年記念祭」が盛大に行われ、倉石初代高田市長の〈序〉にも、歴史を振り返り、市の発展を図ろうとする意気込みが感じられます。

その意気込みを具体的な提言という形にしようと考えたのでしょうか、市史には「上越発展策」という別冊付録が付けられています。(復刻版「高田史」に合本)

「上越発展策」(以下「発展策」)は、以下のような十人の「名士」によって上越、特に高田市の発展について、教育から産業まで多岐にわたって提言がなされています。

この執筆者のほとんどは旧藩士の出です。また面白いのは、当時、直江津港は改修派と郷津湾築港派に別れ、政争の具とされていましたが、執筆者はこぞって早期郷津湾築港を訴えていることです。人選に当時の改進党系の何らかの意図があったのではと推測されるものがあります。執筆者は以下のとおり。

宮尾舜治　台湾総督府殖産局長兼専売長・帝都復興院副総裁・貴族院議員。
中村弼　経歴不明。
風間萬次郎　裁判所判事・弁護士。
関野貞　工学博士・建築史を確立する。
清水宜輝　上越の電気事業を拡大、中央電気・日曹の誘致など地域事業に貢献。
竹村貞「高田新聞」の創業者。「帝国通信社」初代社長。衆議院議員。
尾田信忠　陸軍大学教授・幼年学校教頭。
竹内金太郎　弁護士。鈴弁事件・阿部定事件・ゾルゲ事件などの弁護。
春山泰治　弁護士。
金澤來蔵　第八代高田中学校校長。

彼らは何を見たか

彼らの上越(高田)に対する共通認識は、一年の三分の一を雪に埋もれるために、炬燵生活で閑談に耽る時間が多く、覇気がないと見ていることです。しかし、この雪国生活が真摯で素直な性格を醸成し、一見して愚鈍のように見えても、また時間はかかっても有能な人材に成長するであろうと見、口をそろえて「人材の育成を図れ」と唱えています。

宮尾舜治は「真摯率直」の代表に「霜台公上杉謙信」を挙げ、堕落した今日の社会に、この性質を旗印にして天下に号令しなければならないと叫んでいます。

産業について共通しているのは、大工業ではなく家内工業的なものから地道に起こしていくべきであろうと提言しています。当時としては当然のことですが、家内工業として流行していたバテンレースをほとんど全員が挙げています。羽二重などの繊維産業を推奨



築港が計画された郷津湾



南北に2キロメートルの真直ぐな高田のまち

しているのは明治期に、このような繊維工業がいくつか興ったためであろうと思われます。

しかし、上越には産業を興そうとする気概が無いと指摘しています。その原因として、土地が比較的豊かであるために気概を生まない。また大地主が土地を占有するだけで投資意識が無いなどを挙げています。清水宜輝は「一資を得れば一商を起こし、一財を得れば一工を創むる」の精神が必要であると説いています。

個別に見ると、中村弼という人物の出自、背景ついては唯一人不明ですが、封建都市高田は制度が廃絶すれば、もとの青田ケ原に戻るべき運命だったという鋭い指摘をし、新たな都市としての生命は産業しかないと述べています。そして、頸城三郡の豊富な労働人口を華僑のように海外に進出させ、得た富を故郷の産業振興の資本に使えと言っています。彼は、上越の発展策は世界に求めるべきだと結んでいます。

関野貞は建築学者らしく、杜の町高田を好きであるとしながらも、寂しく雪国の貧しい町という印象を与えると述べています。高田はまちそのものが世界で唯一の雪に関する研究所であり、その具体的な成果として生まれたのが「雁木」で、行政によって雁木の統一化と保全を図るべきであるとし、南北に長いまちの構造は防火上危険であり、防火壁あるいは耐火構造の建物を各所に設けるようにと、具体的な提言をしています。そして、細長い市街区をどのようにするのか、それは市の発展と密接な関係にあり、これからの方向性を明確にしておかなければならないと言っています。

私たちは何を見るか

「発展策」の内容には、当時の国策的海外進出やアジア主義などの影響があり、多少唐突な意見もみられますが、基本的な考え方は今でも通用し、参考にすべき点も多くあります。

しかし、注意しなければならないのは、執筆者の誰もが地元に在住していないということです。（金澤は校長として赴任）

藩からの禄が無くなれば、自立の基盤を持たない大方の旧藩士は、土地を離れざるを得ないのは仕方のないことでしょう。

「発展策」には、そのような故郷を離れざるを得なかった人々が、中央で活躍するようになり、愛郷心の発露として「人材の育成を図れ、産業振興を図れ」と、論じている感があります。それも、多少、高見に立った感じで……。

この右のことは、今でも郷土出身者の講演会で、しばしば耳にする言葉です。

これは明治以来、今日に至っても人的供給基地のままで、人材を育成する機関も、留めるだけの経済基盤も出来ていないと言うことではないでしょうか。

「発展策」から見えてくるものは、結果として、そして今さらながら、若い世代をどのように育て、土地に定着させるかの根本的な見直しにあると言えます。

その方法の一つとして、いわゆる団塊の世代のセカンドライフの場として、単純に故郷（ふるさと）回帰を期待するのではなく、積極的に彼らの豊富な知識を人材育成機関に活用することも考えられることです。

（上越産業振興研究所　佐藤和夫研究員）

地域を映す

こどもの眼

川 いきる・人 いきる

■上越教育大学附属小学校
4年1組

暑い夏が終わり、涼しい秋がやってきました。私たちは、保倉川で、ハゼを110匹釣ったり、雨の中三日月湖を見に行ったり、川の源点とも言える源流に行ったりしました。今回は、秋に行った川について紹介します。

源流は、妙高自然の家の奥にありました。ブクブクと下からわき出るように、なっていました。水は、とてもきれいで、冷たかったです。みんな初めて見たので、すごく感動していました。

川は、おだやかな源流から恐怖の7・11水害に変わってしまうことを知っていますか。水害は家などを流してしまいます。これを考えるだけでもこわくなります。私たちは、川がいろいろな姿に変わってしまうことを知り、もっと川のことを調べたくなりました。

四年一組は、川でいろいろな勉強をしました。川の姿、水害、水のちがい、魚や川の生き物などについて、活動を通して考えていきました。人間にとってよりよい川の姿と生き物たちにとって住みやすい川…、どの川が本当に大事な川の姿なのでしょう。私たち四年一組は「川いきる、人いきる」を考え、これからも川を大切にしていきます。



川にどっぷり4年1組33名

〔連載小説〕

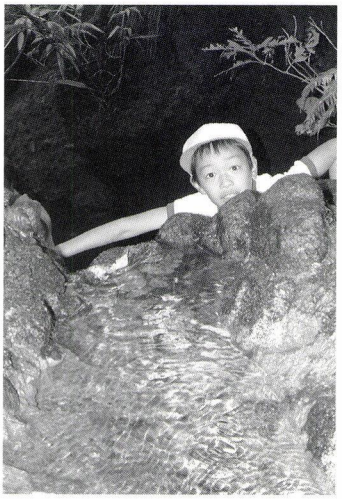
関川物語

どんどん関川を進んでいくと塩の味がするようになり、見たことも無い魚が通りすぎていった。

そこをもっといくと塩の味が濃くなり、ヨッシー、クラン、ギルの三人は、苦しくなってきた。そして、しばらく行くとその目の前には、ヨモギが二本ゆれていた。「これだ！」ヨモギをとったヨッシーは、お母さんの顔を思い出してひれを速めた。すると、ハゼの軍団がおしよせてきたヨッシーは、関川のわきにも他の川があることに気づき、その川へ逃げ込んだ。その川は保倉川だった。そこへヌマチチブが来て、「見慣れない顔だねえ」といった。そこでわけを話すと、帰り道を教えてくれた。ヨモギを握って、帰り道を急いでいるとギルの体が動かなくなった。

ヨッシーが「どうしたの、どうしたの。」と聞くと、ギルは「……」と何もはなさない。しばらくすると、ギルの体から何かが出てきた。そして、空に飛び立った。ギルがトンボになったのだ。そして、ギルが川面を飛びながら「トンボになったから、送ってあげるよ。」といって、ヨッシーとクランをやさしくつかんで、家まで送ってくれた。上から眺めた関川は、とても美しかった。

その後はヨモギを飲んでお母さんは元気になって、今日も関川を泳いでいるとさ。


発見！これが川の源流だ

五・七・五作文

秋の川　紅葉うつり　もようがえ

源流は　ちょろボコスイスイ　わきでてる

4の1　雑魚捕り名人　釣り名人

保倉川　となりの湖　三日月湖

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

■一二〇年前の鉄道を少し歩いてみた。実際に現地に立って見ると、新井から除戸・原通の路線は、関山に向かってかなりの急勾配になることが分かる。また、大田切の工事も一二〇年の歳月を経て、ほとんど自然の中に溶け込んでいた。しかし、この大工事の景観は歴史遺産として伝えたいものである。

スイッチバックが廃止になって、破棄された旧関山駅のホームも駅名の看板も草むらの中に見えた。時の流れを感じさせた。

■川島氏の「思い出のジャンプ台」は、ノスタルジーではなく、戦後の復興期の時代の意気込みを感じさせるものである。

第7巻1号　3月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」冬号
第六巻四号　通巻二十四号
発行日／平成十八年十二月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二一〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三－九－五
〒九四二－〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十八年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)

